

「ベルゼブル論争」(ルカによる福音書十一章一四〜二八節)

1 悪霊を追い出す

今日の箇所、区切りが少し長いこともあって、なかなか掴みにくい、難しいところがあります。よく解きほぐしながら、ご一緒に御言葉に聞きたいと思えます。

この箇所、悪霊を追い出すというところですが、まず思い起こしていただきたいのは、これまで私ども、何回も、同じように記事を読んできたことです。ガリラヤにおける神の国の宣教のはじめから、そうしたいやしをイエスが行ったことが記されています(四・三一)。そうしたいやしこそが、神の国の宣教そのものでもあったのです。それがここで、エルサレムへと旅する中でなされた。ですから今日の箇所を書いてあることも新しいことではない、いままでイエスのなさっていたことであつた、そう考えれば、少しとらえやすくなるのではないかと思えます。

イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であつた。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた(一四〜一六節)。

「口を利けなくする悪霊」とあります。口が利けなくなることは、むしろすべて悪霊の仕業というわけではありません。ときには神ご自身がそうなさる。洗礼者ヨハネの父ザカリヤの場合がそうでした(一・二〇参照)。しかしここでははっきり悪霊のせいでした。

申し上げたように、悪霊に取りつかれた人をイエスがいやされたことを、私どもは何度も聞いています。しかし今日の聖書箇所は、このイエスによるいやしそのものをも問題にしているではありません。

問題になっているのは、そこに居合わせた群衆の反応です。まずは「驚嘆した」とあります。おそらくそうでしょう。しかし必ずしも皆が驚嘆した、感心し、ほめ称えたというわけではありませんでした。イエスのいやしのわざを喜ばない、中傷し、神の權威の証拠を見せろと要求する人たちがいたというのです。むしろそれが主な反応だったようです。

そうした人が誰であつたか、ルカのこの箇所には書いてありません。しかしマタイによる福音書の同じ記事を見ると、それが「ファリサイ派の人々」(二二・二四)であつたことが分かります。

悪霊につかれた人のいやし、大きく言えば、神の国の宣教、このイエスの働きを取り囲む環境は、ガリラヤで伝道していた時とは、少し違つてきていたのです。ご承知のように、イエスは、いま弟子たちと共にエルサレム目ざして旅をしています。メシアとしての十字架の死をしっかりと見つけながら旅をしています。そのイエスの道行きを、神の御業を妨害する人々がいたのです。

それは当時ユダヤの宗教を牛耳っていた人たちです。祭司、ファリサイ派、律法学者、政治のグループでは、長老、ヘロデ党などです。イエスの宣教を、自分たちをおびやかすものとして、憎悪をもって見ていました。見ていただけでなく、動き始めていたのです。

イエスの評判が民衆のあいだに広がり、イエスをメシア（救い主）とする者たちが増えて行ったら、祭司にとつても、ファリサイ派にとつても、自分たちの立場や体制にとつて都合の悪いことでした。ファリサイ派を始めとして敵対者たちがうごめきはじめています。

イエスの憐れみは少しも変わりません。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」（五・三二）。イエスは、貧しい者、苦しむ者、病む者、罪深い者、差別されている者などに神の憐れみを伝えるために来られたのです。そしてこの時、口の利けない人がいやされます。群衆は驚嘆します。しかしこうしたことは、敵対者には困ったことだったので。ガララヤのとくと今とでは、状況は明らかに違うものとなりました。

2 神の国

先週、私どもは、主の祈りを、祈りは聞かれるとの信仰をもって祈り求めよというイエスの教えとともに聞いたところです。問題の中心はあくまで弟子たちの信仰、その歩みでした。

しかし、今日のところは、一転して、問題は、弟子たち、すなわち、私どもではありません。そうではなくて、私どもが信じ従っていくその方、すなわち、イエス、この方はだれか、どのような方か、ということでした。今日の箇所を前に私どもも少し頭を切り替えないといけないようです。

悪霊につかれ、口が利けなくなっていた人をいやしたイエス、その働きを中傷し非難したのが、ファリサイ派の人たちでした。この人たちは、イエスは、悪霊の頭ベルゼブルの力を使って悪霊を追い出しているのだ、つまり、強い悪霊によって弱い悪霊を追い出しているのだ、簡単に言えば、イエスは、悪霊と結託していると非難したのです。

「ベルゼブル」というのは、外国から来た神の名で、家の神、家の主人の意味のようです。ユダヤ社会に入り、新約の時代には「下界の神」と呼ばれ、忌み嫌われ、悪霊の頭領のように見られていたのです。ただ一般に「悪魔」と訳されるサタンと同じではありません。サタンの子分の筆頭のような存在です。

今日の箇所には、悪霊とかサタンとか、私どもの感覚ではなかなか捉えにくい言葉が出てきますけれど、古い時代の世界観、世界像で、そうした言葉が用いられていると、少し距離をおいて受けとってよいと思います。ただその意味することは私どもにもいまも深い関わりがあります。さて先ほどのファリサイ派の非難に対するイエスの反論を見てみましょう。

しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒

れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか・・・」(一七〇～一八節)。

ここにイエスの反論の一つがあります。ファリサイ派の非難は、イエスは悪霊と結託しているというものでした。

これに対してイエスは、彼らの意表をつくような、面白い反論をしています。ふつうなら、いや違う、私は悪霊なんかじゃない、善き霊だと主張するところでしょうけれど、もしわたしが悪霊の頭領だとすれば、そこに「内輪もめ」が生じないかとイエスはいうのです。

先ほど、ベルゼブル(バル・ゼブル)とは、家の神という意味だと申しましたけれども、つまり、家の神が、家を治められなくなるのではないか、というのです。余裕の反論です。その上でイエスはここで起こっていることを明らかにしています。

しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武器をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている(二〇～二三節)。

イエスによれば、ここで起こっていることは、強い悪霊が、弱い悪霊を追い出したという内輪もめではない。悪霊どもの屋敷が、悪霊どもの国そのものが、外から、攻撃されているのだというのです。イエスのいやしのわざにおいて、神が力をもって働いているのです。悪霊どもは追い出され、支配者の交替が余儀なくされている、すなわち、神の国が来ているのです。

聞き逃してならないのは、悪霊に対する神の戦いに参加するように、皆が呼びかけていることです。「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている」。わたしに味方し、悪霊との戦いに加わらないことは、サタンの支配を許し、自らもその下で悪霊と共に人を抑圧するのに加わることにならざるをえないのだと。

3 神の言葉に聞き、それを守る

今日の聖書箇所、少し長くとつているので、その分、お分かりにくかったかも知れませんが。群衆の反応を受けてイエスが語り始めてから、話が終わるまでを見ておきたかったからです。そこで今日の箇所の終わりのところを最後に取り上げておかなければなりません。

イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。「なんと幸いなことでしょう。あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」。

しかし、イエスは言われた。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」(二七〜二八節)。

今日の箇所は、イエスのいやしを目の当たりにして「群衆は驚嘆した」というところから始まっています。

そして驚く人の中に、純粹に驚き、いやしの出来事に感動した人も、やはりいたのです。ここにあるのは、そうした人の言葉です。感極まったように、声高らかに語ったのは一人の女性でした。

調子の高いこれらの言葉は、イエスの誕生物語を思い起こさせます。とくにヨハネの母エリサベトがマリアに対して言った祝福の言葉です(一・四二)。しかしイエスはこの女の言葉から、むしろ御言葉に従順に従う母マリアのことを思い浮かべていたようです。「わたしは主のはしため、お言葉通り、この身になりますように」(一・三八)、あのマリアの言葉です。ですから、「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人」というここでのイエスの言葉は、母マリアのことでもあり、それとともに、いまイエスに従っている弟子たちへの祝福の言葉です。

しかしこの言葉は、第一には、ここで悪霊からイエスによって解放され、ものを言うことが出来るようになった人について、いやまさにその人についてこそ言われなければならぬように私には思われます。

それはどういうことでしょうか。悪霊を追い出していただき、語ることが出来るようになったこの人、しかしこの彼も、完全な意味で到来した神の国に生きはじめたわけではありません。悪霊は彼から追い出されました。しかし死滅したのではなく、なおも働いているのです。この後サタンはユダに入り(二一・三)、イエスの十字架の死と復活によって、その力を決定的に奪われます。

しかしなおも、神に反対する諸力がこの世に働いていることを、私ども人間を知らず知らずのうちに、神の思いとは反対の方へと運んでいく力がなおこの世に働いていることを、認めないわけにはいきません。パウロがわれわれを「支配する諸霊」(ガラテヤ四・九)と言ったものです。神の目が貧しい人に向かっているのに私どもの目は、金持ちのほうに向かっています。神の目が、赦しと共存に向かっているのに、私どもの目は、裁きと争いに向かっています。神の目が、造られたもののすべての調和と平和に向いているのに、人間だけが、私どもの国だけが、私どもだけが幸せであればよいという方に向かって行きます。そうした諸霊のただ中でお私どもは生きるほかないのです。

しかし私どもは、主イエスによって、あの口の利けない人が悪霊から解放されたように、すでに解放され、救われています。それは間違いない事実です。同時にいまだこの世にあつて、もろもろの諸霊のあいだに生きています。そうした中で、どのように私どもは、進んで行くべきでしょうか。「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人」。ここに私どもの歩むべき道が示されています。神の言葉を聞き、従い、そこにしっかりと立って、神の国を証ししていくのです。

(十一月二一日)